テムズ川の源流から河口まで

研究第二部主任研究員
橋本　賢

テムズ川の流域面積は13600㎢で、利根川より若干小さな流域面積の流路延長が365kmの河川です。ただ、水源地の標高が106ｍというのは日本の河川では考えられない事です。まずはその水源地を訪ねた結果が写真①です。1/5万の地形図に出ているテムズ川水源地（THAMS HEAD）の表示を頼りに現地に行ったところ、この地図を店の前に出しているテムズヘッドインというパブはすぐに見つける事ができたのですが、肝心の水源の方は付近に水の流れは無い上に水源のある所は私有地（牧場）に有ります。うろうろしていれば泥棒に間違われそうで、30分余り探した挙句、結局水源は見つかりませんでした。(水源には、ここがテムズ川の水源ですという立札があるはずなのですが）といった訳で、写真②がテムズ川の水源付近の状況です。頭ではこの辺りが水源と判ってはいても、日本の河川と比較して何ともしっくりとこない風景でした。この水源地探しの後、1/5万の地形図を頼りにテムズ川の水源域の流れを見つけ、初めて水の流れに出会ったのが写真③で、写真の中にも見える RIVER THAMS という文字を見た時は感激でした。あたりまえと言えばあたりまえですが、その名も高きテムズ川もこんな小川でした。

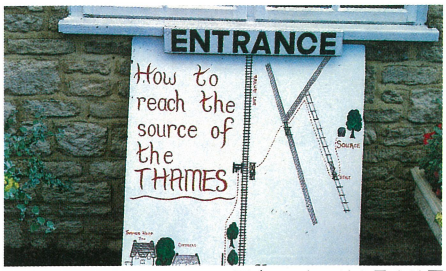

写真-1 水源地を示す地図

写真-1 テムズ川源流域

写真-2 テムズ川上流

この後、川沿いに下ってきて最っとも印象に残った水辺が、ロンドンからは約100km上流にあるヘンリー・オン・テムズの水辺です。

このヘンリーのテムズ川に架っている橋は、これより少し上流のレディングにあった修道院の解体に伴って発生した石材を利用した石橋で、約200年前に築造されたものです。テムズ川ではこの様な石橋が驚く程多く、ニューブリッジなる橋は15世紀中葉のものとされているといった具合です。(写真④)

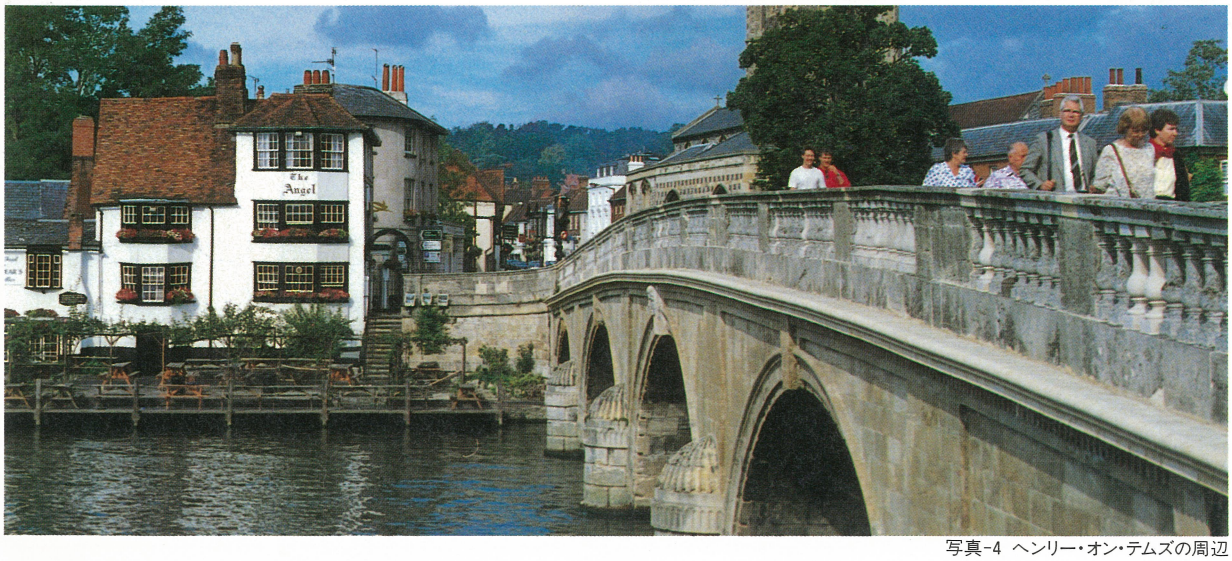

写真-4 ヘンリー・オン・テムズの周辺

テムズ川では全川を通じて実に多くのボートが係留され、多くの人が舟遊びを楽しんでいる事が印象的ですが、ヘンリーは、「ヘンリー・ロイヤル・レガッタ」という世界的なボートレースで有名な所です。現地では大型のモーターボートを何十も見かけましたが、いずれのモーターボートも手漕ぎボート程度のスピードで、ゆっくりと舟遊びを「楽しむ」ものばかりでした。大英帝国の蓄積が生みだしたゆとりは、一朝一夕には消えていない感があります。我が国の水面利用者とはちょっと違うようです。

舟遊びと切っても切れないテムズ川名物(?)が閘門(LOCK)です。舟運用に水位を保つ堰(WEIR)と対になっている閘門で上下流の水位差を調節し、舟が往来する仕組となっています。写真⑤はその中で最大のテディントンロックです。このテディントンは、ロンドンのタワーブリッジから約30km上流になりますが、ここが高潮影響区間の上流端になっています。そしてこのテディントンから上流のテムズ川200kmの区間に約50の閘門があると申し上げれば、テムズ川名物と記した理由がお判りいただけると思います。

写真-6 テムズ川河口

写真-5 テディントンの閘門

そんなこんなでテムズ川を下って来た訳ですが、紙数の関係でいきなりテムズ川の河口へと話が飛びます。

河口といっても、どこからが海でどこからが川か判然としないのですが、訪れた所はその地名からテムズ川の河口と判断しても良さそうな所です。「SOUTHEND ON SEA」なる所です。(写真⑥) ここには、水制のように河岸から川の中央に伸びた長さ約2kmの桟橋(サウスエンド・ピア)があります。写真はこの桟橋の突端から対岸を撮影したものですが、訪ずれた日の天候の悪さと、この地点の川幅が約8kmということが災いして良い写真にはなりませんでした。ただ、水流のない水源から始まったこの調査の最後にこの地点に立った時は、何とも感慨深いものがありました。

テムズ川を上流から下流まで歩いて最っとも印象に残ったのが、水辺を考える時に人の歩く所と水面の距離を小さくすることの大切さです。テムズ川を見る限りそれ程凝ったことは行われていないのに、何とも言えぬ雰囲気があるのは、人と水面の近さでした。